

十六、七のころ

永井荷風

青空文庫

十六、七のころ、わたくしは病のために一時学業を廃したことがあった。もしこの事がなかったなら、わたくしは今日のように老に至るまで閑文字かんもじを弄もてあそぶが如き遊惰ゆうだの身とはならず、一家の主あ人ともなり親ともなつて、人間並の一生を送ることができたのかも知れない。

わたくしが十六の年の暮、といえ、丁度日清戦役の最中もなかである。流行感冒かかに罹かかつてあくる年の正月一ぱい一番町の家の一間に寝ていた。その時雑誌『太陽』の第一号をよんだ。誌上に誰やらの作った明治小説史と、紅葉山こうようさんじん人の短篇小説『取舵』などの掲載せられていた事を記憶している。

二月になつて、もとのように神田の或中学校へ通つたが、一週間たたぬ中うちまたわるくなつて、今度は三月の末まで起きられなかつた。博文館が帝国文庫という総称の下に江戸時代の稗史はいし小説の復刻をなし始めたのはその頃からであらう。わたくしは病床で『真書しんしよたいこうき太閤記』を通読し、つづいて『水滸すいこでん伝』、『西遊記』、『演義三国志』のような浩こうかん漣な冊子をよんだことを記憶している。病中でも少年の時よんだものは生涯忘れずにいるものらしい。中年以後、わたくしは、機会があつたら昔に読んだものをもう一度よみ返して見ようと思ひながら、今日までまだ一度もそういう機会に出遇わない。

震災の後、シャンハイ上海の俳優が歌舞伎座で孫悟空の狂言を演じた

ことがあつたが、わたくしはそれを看^みた時、はつきり原作の『西遊記』を記憶していることを知つた。『太平記』の事が話頭に上ると、わたくしは今でも「落花の雪にふみまよふ片野あたりの桜狩」と、海道下りの一節を暗誦して人を驚すことが出来るが、その代り書きかけている自作の小説の人物の名を忘れたりまたは書きちがえたりすることがある。

鶯の声も既に老い、そろそろ桜がさきかけるころ、わたくしはやつと病^{びようじよく}褥^{まくら}を出したが、医者から転地療養の勧告を受け、学年試験もそのまま打捨て、父につれられて小田原の町はずれにあつた足^{あしがら}柄^{がら}病院へ行く事になつた。(東京で治療を受けていた医者^{かんだじんぼうちょう}は神田神保町に暢春医院の札を出していた馬島永徳という学

士であつた。暢春医院の庭には池があつて、夏の末には紅白の蓮の花がさいていた。その頃市まちなか中の家の庭に池を見ることはさして珍しくはなかつたのである。

わたくしは三カ月ほど外へ出たことがなかつたので、人力車じんりきしゃから新橋の停車場ていしやじように降り立つた時、人から病人だと思われはせぬかと、その事がむやみに気まりがわるく、汽車に乗込んでからも、帽子を眉深まぶかにかぶり顔を窗まどの方そむへ外向けて、ろくろく父とも話をせずにいた。国府津こうづの停車場前からはその頃既に箱根行の電車があつた。(しかし駅という語はまだ用いられていなかった。)

○ 病院に着いて、二階の一室に案内せられ、院長の診察を受けたりしていると、間もなく昼飯時になつた。父は病院の食物を口

にしたくなかつたためであらう。わたくしをつれて城内の梅園に
昼飯を食べに出掛けた。その頃、小田原の城跡には石垣や堀がそ
のまま残つていて、天主台のあつた処には神社が建てられ、その
傍に葭よし簣ずばり張の休茶屋やすみぢややがあつて、遠眼鏡とおめがねを貸した。わたくし
が父に伴われて行つた料理茶屋は堀端に生茂つた松林のかげに風
雅な柴折門しおりを結んだ茅葺かやぶきの家であつた。門内は一面の梅林で、
既に盛りを過した梅の花は今しも紛々として散りかけている最中
であつた。父はわたくしが立止つて顔の上に散りかかる落梅を見
上げてゐるのを顧み、いかにも満足したような面持おももちで、古人の
句らしいものを口ずさんで聞かされたが、しかしそれは聞き取れ
なかつた。後年に至つて、わたくしは大田南畝おおたなんぼがその子淑ししゆくを伴

い御薬園の梅花を見て聯句れんくを作った文をよんだ時、小田原城址じょうしの落梅を見たこの日の事を思出して言知れぬ興味を覚えた。

父は病院に立戻ると間もなく、その日もまだ暮れかけぬ中うち、急いで東京に帰られた。わたくしは既に十七歳になっていたが、その頃の中学生は今日とはちがつて、日帰りの遠足より外滅多ほかに汽車に乗ることもないので、小田原へ来たのも無論この日が始めてであった。家を離れて一人病院の一室に夢を見るのもまた始めてである。東京の家に帰ったのは梅雨つゆも過ぎて庭の樹に蝉の声を聞くころであった。されば始めて逢う他郷の暮春と初夏との風景は、病後の少年に幽愁の詩趣なるものを教えずにはいかなかったわけである。

病院は町はずれの小高い岡の中腹に建てられていたので、病室の窓からも寝ながらにして、曇った日にも伊豆の山影を望み、晴れた日には大嶋の烟けむりをも見ることができた。庭つづきになつた後う方しろの丘陵は、一面の蜜柑畠みかんばたけで、その先の山地に茂つた松林や、竹藪の中には、終日鶯と頬ほお白しろとが囁ささつていた。初め一ひと月つきばかりの間は、一日に二、三時間しか散歩することを許されていなかった。わたくしはあまり町の方へは行かず、大抵この岡の上の松林を歩み、木の根に腰をかけて、箱根双子山ふたごやまの頂きを往來する雲を見て時を移した。雲の往來ゆきするにつれて山の色の変るのが非常に物珍しく思われたのであつた。病室にごろごろしている間は、貸本屋の持つて来る小説を乱読するより外に為すことはな

い。

博文館の『文芸倶楽部』^{クラブ}はその年の正月『太陽』と同時に第一号を出したので、わたくしは確にこれをも読んだはずであるが、しかし今日記憶に残っているものは一つもない、帝国文庫の『京伝傑作集』や一九の『膝栗毛』、または円朝の『牡丹燈籠』^{ぼたんどうろう}や『塩原多助』のようなものは、貸本屋の手から借りた時、披いて見たその挿絵が文章よりもかえって明かに記憶に留^{とどま}っている。

その頃発行せられていた雑誌の中で、最も高尚でむずかしいものとして尊ばれていたのは、『国民の友』、『しがらみ草紙』、『文学界』の三種であった。まだ病気になる頃、わたくしは同級の友達と連立って、神保町の角にあった中西屋という書店に行

き、それらの雑誌を買った事だけは覚えていますが、記事については何一つ記憶しているものはない。中西屋の店先にはその頃武蔵屋から発行した近松の浄瑠璃、西鶴の好色本が並べられてあつたが、これも表紙を見ただけで買いはしなかつた。わたくしが十六、七の時の読書の趣味は極めて低いものであつた。

四カ月ほど小田原の病院にいる間読んだものは、まず講談筆記と馬琴の小説に限られていたといつてもよい。しかし後年芝居を見るようになってから、講談筆記で覚えた話の筋道は非常に役に立った。

東京の家からは英語の教科書に使われていたラムの『沙翁物語』、アービングの『スケッチブック』を送り届けてくれたので、

折々字引と首くびツピキ引をしたこともないではなかつた。

わたくしは今日の中学校では英語を教えるのに如何なる書物を用いているか全く不案内である。中学校で英語を教えることは有害無益だという説もだんだん盛になって来るようである。思出すままに、わたくしたちが三、四十年前中学校でよんだ英文の書目を挙げて見るのもまた一興であろう。その頃、英語は高等小学校の三、四年頃から課目に加えられていた。教科書は米国の『ナショナル・リーダー』であつた。中学校に進んで、一、二年の間はその頃新に文部省で編纂した英語読とくほん本が用いられていたが書名は今覚えていない。この読本は英国人の教師が生徒の発音を正しくするために用いたので、訳読には日本人の教師が別の書物を用

いた。その中で記憶に残っているものは、マコーレーのクライブの伝。パアレーの『万国史』。フランクリンの『自叙伝』。ゴードスミスの『ウエークフィルドの牧師』。それからサー・ロジャス・デカバリイ。巴里屋根裏の学者の英訳本などである。中^{なかむ}村敬宇^{らけいゆう}先生が漢文に訳せられた『西国立志編』^{さいこくりつしへん}の原書もたしか読んだように思っている。

中学を出て、高等学校の入学試験を受ける準備にと、わたくしたちは神^{かんだにしきちょう}田錦町の英語学校へ通った時、始めてヂッケンスの小説をよんだ。

話は前へもどって、わたくしは七月の初東京の家に帰ったが、間もなく学校は例年の通り暑中休暇になるので、家の人たちと共

に逗ず子の別荘に往ゆき九月になつて始めて学校へ出た。しかしこれまで幾年間同じ級にいた友達とは一緒になれず、一つ下の級の生徒になつたので、以前のように学業に興味を持つことが出来ない。休課の時間にもわたくしは一人運動場の片隅で丁度その頃覚え初めた漢詩や俳句を考えてばかりいるようになった。

根岸派の新俳句が流行し始めたのは丁度その時分の事で、わたくしは『日本』新聞に連載せられた子規しきの『俳諧大要』の切抜を帳面に張り込み、幾いくたび度となくこれを読み返して俳句を学んだ。

漢詩の作法は最初父に就ついて学んだ。それから父の手紙を持つて岩いわ溪たに裳しよう川せん先生の門に入り、日曜日ごとに『三体詩』の講義を聴いたのである。裳川先生はその頃文部省の官吏で市ヶ谷見附

に近い四番町の裏通りに住んでおられた。玄関から縁側^{えんがわ}まで古本が高く積んであつたのと、床^{とこ}の間に高さ二尺ばかりの孔子の坐像と、また外に二つばかり同じような木像が置かれてあつた事を、わたくしは今でも忘れずにおぼえている。

わたくしは裳川先生が講詩の席で、始めて亡友井上^{いのうえあ}唾々君を知つたのである。

その頃作つた漢詩や俳句の稿本は、昭和四年の秋感ずるところがあつて、成人の後作つたいろいろの原稿と共に、わたくしは^{ことごと}悉くこれを^{えいたいばし}永代橋の上から水に投じたので、今記憶に残っているものは一つもない。

わたくしは或雑誌の記者から、わたくしの少年時代の事を問わ

れたことがあったので、後にその事を思出してこの記を書いて見たのである。しかし過去を語るのは、覚めた後前夜の夢を尋ねて、これを人に向つて説くのと同じである。

鷗外先生が『私が十四、五歳の時』という文に、「過去の生活は食つてしまった飯のようなものである。飯が消化せられて生きた汁になつて、それから先の生活の土台になるとおりに、過去の生活は現在の生活の本もとになつてゐる。またこれから先の、未来の生活の本になるだろう。しかし生活してゐるものは、殊に体が丈夫で生活してゐるものは、誰も食つてしまった飯の事を考えてゐる余裕はない。」と言われている。全くその通りである。

いま現在の生活からその土台になつてゐる過去の生活を正確に

顧みて、これを誤りなく記述する事は容易でない。糞ふん尿にょうを分
 析すれば飲食した物の何であつたかはこれを知ることが出来るが、
 食つた刹那せつなの香味に至つては、これを語つて人をして垂涎すいぜん三尺
 たらしむるには、優れたる弁舌が入用になるわけである。そして、
 わたくしにはこの弁舌がないのであつた。

乙いつが亥がい正月記

青空文庫情報

底本：「荷風随筆集（下）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年11月17日第1刷発行

2007（平成19）年7月13日第23刷発行

底本の親本：「荷風随筆 一〜五」岩波書店

1981（昭和56）年11月～1982（昭和57）年3月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年3月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

十六、七のころ

永井荷風

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>